

# キリスト教と文化は衝突したか

——RCCの歩みを振り返って——<sup>1</sup>

## 辻 学

### はじめに

本稿は、2011年12月13日に開催されたRCCミニフォーラムにおける林忠良氏（前経済学部宗教主事、RCC初代センター長）の講演内容を受けて、林氏が明らかにした、RCC設立時に意図されていた性格や目的が、その後どのように継承されていったか（またされなかったか）を検証すると共に、林氏が指摘しているRCCの「喫緊の課題」、すなわち『『キリスト教主義』が大学の『研究・教育』に果たし得る積極的な意義を、『歴史的経緯』に依存するのではなくて、その現在における意義として、再構築すること』（当日配布のレジュメ8頁）<sup>2</sup>について若干の私見を述べるものである。

筆者自身、関西学院大学に奉職していた1997年4月から2007年3月の間に、RCCの主任研究員、また研究プロジェクトのメンバーとして、その活動に深く

---

1 本稿は、2012年5月28日開催の、関西学院大学キリスト教と文化研究センター（以下「RCC」と略記）ミニフォーラム（研究プロジェクト「関西学院におけるキリスト教主義教育の展開」主催）における講演の第Ⅰ部と第Ⅱ部を、講演時以降のRCCの歩みをも踏まえて文章化したものである。故栗林輝夫教授は、法学部宗教主事としての務めと並んで、RCCにおける働きに力を入れておられた。後述する『キリスト教平和学事典』はその大きな成果の一つであるが、栗林教授はRCCの活動に大きく貢献され、「キリスト教と文化」という、関西学院大学の研究と教育における大事な課題を担う中心的な役割を果たしてこられた。その貴重なお働きへの感謝を込めて、本稿を栗林教授に謹んで献呈したい。

2 林氏によるこの講演は、残念ながらまだ文章化されていない。早い時期の実現が望まれる。

関わりを持ってきた<sup>3</sup>。本稿は、その経験も踏まえた上での、RCC発足以来の歩みに関する考察である。

## I 問題設定

RCCは1997年4月1日に発足した。初年度の「年次報告」には、センターの活動基本方針が4つ記されている。第1は、センターの目的が「キリスト教と人間・世界・文化・自然の諸問題」に関する総合的調査・研究」と「本学のキリスト教主義教育の内実化」（規程第2条）にあることを規定し、第2は、センターの考える「文化」が「最も広義に、人間のかかわる現代的な課題を包摂する概念」であることを述べている。

注目されるべきは、活動基本方針の第3と第4である。

### 3. <と>の強調（学際性）

「<キリスト教>とそれらの諸問題とが触れ合う接点で生じる問題に焦点を合わせる。従って、<キリスト教>の延長線上で問題解決を探ることよりも、キリスト教の<外>からなされる問題提起を真摯に受け止め、それとの折衝（葛藤や緊張をふくむ）のなかで、課題をになうことに努力する。そのため研究員の構成も研究も<キリスト教>に縮約しないように配慮する。また、非キリスト者との共同、学外との共同、外国との共同を積極的に図る。」（下線原文）

### 4. キリスト教主義教育の内実化

「本研究センター活動は<キリスト教主義教育>の「研究」に特化させず、当面は上記の研究方向の基盤整備に努力を傾注し、それを通じて、キリスト教主義教育の内実化に寄与することを目指す。」

3 主任研究員：1998、1999（春学期のみ）、2002、2003、2004（春学期のみ）、2005、2006年度。研究プロジェクト「暴力とキリスト教」メンバー：2002～2003年度（2004年度より総合コースとして授業提供）。研究プロジェクト「聖典と今日の課題」メンバー：2005～2006年度。その他、複数分野専攻制（MDS、後述参照）における副専攻プログラム授業（1998～2000年度）、「父母のためのキリスト教講座」（後述参照）（2000年度春学期、2006年3月24日特別講座、2007年度春学期）も担当した。

つまり、キリスト教〈と〉文化が触れ合い、ぶつかる接点で生じる諸問題を研究課題とするのがRCCの役割だというのである。そのために、組織の面でも「キリスト教内部」の人間だけで固まらないように配慮するという。また、キリスト教主義教育について考察するにあたって、キリスト教内部での議論を展開するのではなく、キリスト教〈と〉文化の接点という視点でなされた研究の成果を盛り込むことによって、キリスト教主義教育の内実化を図るという手法がとられることになる。

本稿の課題は、この活動基本方針が果たしてその後どのように維持され、展開されてきたかを、組織・活動の歴史を振り返って検証することにある。

## Ⅱ RCCの歩みを振り返る

### 1. 研究員の人選

RCCには、センター長1名、副センター長2名、主任研究員4名（いずれも任期2年）の他、若干名の研究員を置くことになっている。このうちセンター長と副センター長、そして主任研究員は、大学所属の宗教主事と神学部教員で構成されるが、研究員はそれ以外の大学教員にも委嘱される。というのも、上述の「活動基本方針」に、「研究員の構成も研究も＜キリスト教＞に縮約しないように配慮する」と謳われているからであり、この点にRCCの活動の特色が現れるはずだからである。

そこで、この研究員に関する検証から始めることにしよう。いわゆる「キリスト教スタッフ」（神学部教員、宗教主事、宣教師）以外の研究員を以下に挙げる。最後の「（+○名）」は、キリスト教スタッフの研究員数である（敬称略。\*は研究会での発題者、\*\*はフォーラムないしミニフォーラムでの〔研究プロジェクトメンバーでない〕講演者）

- 1997-1998年度：田中きく代\*（文学部）、荻野昌弘\*（社会学部）、矢倉達夫\*（理学部）、高畑由起夫\*（総合政策学部）（いずれも1997年度に発題。1998年度は研究会での発題者なし）
- 1999年度：荻野昌弘（社会学部）、岡本仁宏\*（法学部）、阪智香\*（商学部）、高山奨\*\*（理学部）、矢倉達夫（理学部）、高畑由起夫（総合政策学部）
- 2000年度：岩武昭男（文学部）、荻野昌弘（社会学部）、岡本仁宏（法学部）、矢倉達夫（理学部）、藤田太寅（総合政策学部）、高畑由起夫（総合政策学部）（+1名）
- 2001-2002年度：成田静香（文学部）、荻野昌弘（社会学部）、岡本仁宏（法学部）、矢倉達夫（理学部）、藤田太寅\*（総合政策学部）、高畑由起夫（総合政策学部）（+1名）
- 2003-2004年度：後藤裕加子（文学部）、成田静香（文学部）、荻野昌弘（社会学部）、武田丈（社会学部）、山本剛郎（社会学部）、岡本仁宏\*（法学部）、矢倉達夫（理工学部）、高畑由起夫（総合政策学部）、村田俊一\*（総合政策学部）（+1名）（発題者はすべて2003年度。2004年度は研究会開催なし）
- 2005年度：対馬路人（社会学部）、山上浩嗣（社会学部）、大庭昭博\*（客員研究員。青山学院大学）（+8名）
- 2006年度：対馬路人（社会学部）、山上浩嗣（社会学部）（+7名）（この年度以降、全体での研究会開催なし）
- 2007年度：山上浩嗣（社会学部）（+5名）
- 2008年度：山上浩嗣（社会学部）、オムリ・ブージッド（総合政策研究科研究員）（+5名）
- 2009年度：オムリ・ブージッド\*（総合政策研究科研究員）（+4名）
- 2010年度：オムリ・ブージッド（総合政策研究科研究員）（+5名）
- 2011-2012年度：奥野卓司（社会学部）、オムリ・ブージッド\*（総合政策研究科研究員）、近藤剛（神戸国際大学）、徐亦猛（神戸中華教会）（+9名）
- 2013-2014年度：鈴木慎一郎（社会学部）、水戸考道（法学部）、白波瀬達也（社会学部教務補佐）、三阪夕芽子（社会学部大学院生）、金永完（中国山東大學法学院）、梁陽日（立命館大学）（+6名）

このリストからすぐに見て取れることは二つある。一つは、研究員による活動のあり方が変化しているということである。すなわち、最初は非キリスト教スタッフ研究員による研究会での発題が積極的になされていたのに、その数が次第に減少している。これは、「キリスト教と文化」の「文化」の側からの問題提起が少なくなったことを意味する。また、2004年度を境にして、研究会自体

が開催されなくなっている。このことはおそらく、後述のように、RCCが研究プロジェクト単位での研究を推し進めるようになったことと関係があるだろう（後述4参照）。

もう一つは、メンバー構成の変化である。2005年度から急に、所謂「キリスト教スタッフ」の研究員が増加している。これは、この年度から『キリスト教平和学事典』（教文館）の編集に着手していることに伴う人選と考えられるのだが、ただし、同書の出版（2009年9月）が終わった2010年度の研究員人選にも同じ傾向が認められる。つまり、研究員の活動から見ても人員構成から見ても、RCCの活動は「キリスト教」の側に大きく重心が移ったことがうかがわれるのである。

「研究員」の顔ぶれには2011年度にも大きな変化がある。それは、この年度から研究プロジェクト（後述）のメンバー全員を「研究員」扱いにしたことである。これは、プロジェクト中心に運営される体制へとRCCが移行したため、プロジェクトの構成員とは別にセンター自体の「研究員」を置くことが意味を持たなくなったからであろう。研究プロジェクトの構成員に「キリスト教スタッフ」以外の研究者が加わったことで、その人々が自動的に「研究員」となり、RCCの研究に再び「文化」の側からの問題提起が強まったことは歓迎されるが、しかしこのような形で「研究員」という資格を維持する必要があるのかは疑問でもある。研究費の執行資格などをめぐる問題も関係しているのかもしれないが、プロジェクト単位で動く体制を採る以上、もはや「RCC研究員」という立場が本来担っていた、〈文化〉の側からの問いかけをなしていくという役割は曖昧になっているように思われる。

## 2. 複数分野専攻制（MDS）<sup>4</sup>の授業担当者

RCCは1999年度より、複数分野専攻制の副専攻プログラム「キリスト教と文化」を開設し、授業科目を提供し始めた。

---

4 Multidisciplinary Studiesの略。ただしこの制度は2014年度から略称を「MS」に変更している。

その科目担当者は以下の通りで、下線はキリスト教スタッフ以外の担当者である。下線の担当者についてのみ担当科目名を付記した。

1998年度：前島宗甫、宮谷宣史、松木真一、岩武昭男（文学部、キリスト教と諸宗教A）、辻学、舟木譲  
 1999年度：同上  
 2000年度：前島宗甫、John Conway Perkin（客員、キリスト教と社会C）、田淵結、松木真一、岩武昭男（文学部、キリスト教と諸宗教A）、辻学、舟木譲、大石真一郎（兼任講師、キリスト教と諸宗教B）  
 2001年度：前島宗甫、栗林輝夫、加藤知（理学部、キリスト教と自然A）、松木真一、中道基夫  
 2002年度：前島宗甫、加藤知（理学部、キリスト教と自然A）、松木真一、Joseph DeChicchis（総合政策学部、キリスト教と諸宗教A・B）、舟木譲、中道基夫  
 2003年度：前島宗甫、宮谷宣史、栗林輝夫、矢倉達夫（理学部、キリスト教と自然C）、松木真一、Joseph DeChicchis（総合政策学部、キリスト教と諸宗教A・B）、高畑由起夫（総合政策学部、キリスト教と自然D）、舟木譲、中道基夫、冨浪貴志（非常勤講師、キリスト教と芸術A・B）

この副専攻プログラムにおける授業は、主にキリスト教スタッフによって担当されてはいるものの、それ以外の教員による科目開講も行われており、「キリスト教〈と〉文化」のぶつかり合いが意識された構成と言い得るように思う。

問題は、神学部が科目が移管された2004年度以降<sup>5</sup>もこの問題意識が継続されているかということにある。また、副専攻プログラムを失ったRCCは、その意識を教育活動に還元する場が少なくなった。

### 3. 講演会等

RCCが一番学内外の注目を集める機会は当初から、主催講演会「RCCフォー

<sup>5</sup> したがって、神学部が複数分野専攻制を設けたのは2004年度からであり、現在の関西学院大学教務機構ウェブサイトで、神学部が1997年度から科目提供しているかのように記されているのは不正確である ([http://www.kwansei.ac.jp/a\\_affairs/a\\_affairs\\_000539.html](http://www.kwansei.ac.jp/a_affairs/a_affairs_000539.html) 2015年12月12日確認)。

ラム」であった。この「RCCフォーラム」は原則として、各年度に設定されているRCC全体の研究テーマに沿った講演会であるため、RCCがどのような問題に関心を向けて研究活動を展開しているかを示す役割も担っている。以下は、RCCが各年度に設定した研究テーマと、主催した「フォーラム」およびそれ以外の講演会一覧である<sup>6</sup>。(敬称略、所属は当時のもの。\*はRCCフォーラム・ミニフォーラム以外の講演会)

(1997年度)

研究テーマ：「当面取り組む問題圏」として（１）生命（倫理）の問題、（２）自然・環境の問題、（３）現代社会と宗教（新宗教や民族等）の問題、（４）地域・文化の問題等

村上陽一郎（国際基督教大学）「現代社会と科学技術」

中村桂子（生命誌研究館）「DNAから見えてきた生命像と科学像」

森岡正博（大阪府立大学）「現代日本社会における生命の意味」

\*ベンジャミン・エスクロポロ神父「今、フィリピンは——ネグロスから」

（宗教センターと共催）

(1998年度)

研究テーマ：生命倫理を中心とした問題

山極寿一（京都大学）「動物と人間の接点——ゴリラの心をフィールド・ワークする——」

河合隼雄（国際日本文化研究センター）「心理療法と宗教」

木村利人（早稲田大学）「あなたのいのちは今……？」

\*木村公一（インドネシア・アブディエル神学大学）「スハルト王朝の崩壊——激動のインドネシアの読み方」（宗教センターと共催）

\*清水康子（国連難民高等弁務官）「紛争と援助——コソボより」（宗教センターと共催）

(1999年度)

研究テーマ：生命倫理

野村祐之（青山学院女子短期大学）「生（ビオス）の奴隷からの解放——輝く命の明日に向けて」

波平恵美子（お茶の水女子大学）「脳死臓器移植に見られる日本人の『個人』の始りと終りについての考え方」

高山奨（関西学院大学理学部）「生命科学的視点による文明の意味」

6 所属・身分は当時のもの。\*はRCCフォーラム・ミニフォーラム以外の講演会。

- \*小塩節（フェリス女学院）「もっと光を」
- \*ライフ・スキプステズ（デンマーク王立獣医学・農学高等研究所）「19世紀デンマークの自然科学（H. C. Ørstedを中心に）——キェルケゴールとその時代——」（キェルケゴール研究センター、神学部と共催）
- \*白方誠彌（日本バプテスト病院）「脳死移植とキリスト教倫理」（宗教活動委員会教育研究部主催、RCC共催）
- \*講演会 理学部・RCC共催「生命科学・生命倫理公開講演会」  
Richard J. Cogdell（グラスゴー大学）“Can Photosynthesis Provide a Biological ‘Blueprint’ for the Design of Novel Solar Cells?”
- 京極好正（福井工業大学）「生命科学におけるタンパク質研究——ポストゲノム科学——」
- 白方誠彌（日本バプテスト病院）「脳死と臓器移植をめぐる諸問題」
- \*呉明峰（中国基督教協会）「中国の教会から」（特別講演会。神学部・文学部合同チャペル）
- \*韓文藻（中国基督教協会）「中国の教会事情」（特別講演会）

（2000年度）

研究テーマ：民族と宗教

- 池明観（韓国翰林大学）「『東アジア』と日本」
- 花崎皋平「日本のナショナリズムと宗教」
- 阿満利麿（明治学院大学）「『無宗教』社会・日本の課題」
- エスター・ユスフ（NGO「祖国と国民連帯」）「インドネシアにおける宗教対立と和解」（ミニフォーラム）
- \*S. フォレンヴァイダー（ベルン大学）「パウロにおける『義認』——古い見解及び新しい見解——」（神学部と共催）
- \*J. ヘンキース（ベルリン・フンボルト大学）「ボンヘッフアーの神学と讃美歌」（神学部と共催）
- \*韓国・日本 国際キェルケゴール・カンファレンス 表在明（高麗大學）・金龍一（啓明大學）「韓国のキリスト教・キェルケゴール」（韓国キェルケゴール學會・日本キェルケゴール研究センター主催、神学部・RCC共催）

（2001年度）

研究テーマ：民族と宗教

- 小田淑子（関西大学）「イスラームにおける信仰と律法～イスラームの宗教性」
- 小杉泰（京都大学）「現代イスラームと民族問題」
- 中田考（山口大学）「イスラームの世界観と宗教対話」
- \*ブースィ・スニール・バーヌ「インドの宗教とカースト差別」（神学部と共催、日本基督教団兵庫教区後援）

\*フィリス・トリブル「ミリアムを回復して」(神学部と共催)

(2002年度)

研究テーマ：民族と宗教

森孝一(同志社大学)「“God Bless America”と星条旗——「同時多発テロ」後のアメリカを読み解く——」

Olivie Millet(スイス・バーゼル大学)・Dominique Millet-Gerard(パリ・ソルボンヌ大学)「ヨーロッパ知識人から見たイスラーム」

エーバーハルト・ブッシュ(ゲッティンゲン大学)「バルト神学と反ナチ闘争——ユダヤ人問題を中心に——」(神学部と共催)

板垣雄三(東京大学)「日本社会のイスラーム理解を再検討する」

パネルディスカッション「民族、宗教、紛争——多宗教社会・日本からキリスト教とイスラームを問う」(宮谷宣史[神学部]、後藤裕加子[文学部]、畑祥雄[総合政策学部])

\*長倉洋海(フォトジャーナリスト)「アフガニスタンを生きる」(宗教活動委員会と共催)

(2003年度)

研究テーマ：エスニシティ・宗教・グローバリズムを問う

栗林輝夫(関西学院大学法学部)「『ブッシュの戦争』とキリスト教原理主義——グローバリズムとアメリカの宗教戦略——」

木村公一(伊都キリスト教会)「バックス・アメリカーナ(アメリカの平和)とエスニシティ——インドネシアとイラクにおける経験から——」

C・ダグラス・ラミス(元津田塾大学)「アメリカは変わったか」

村井吉敬(上智大学)「民族・宗教戦争とグローバル化——インドネシアを事例として——」

藤井創(金城学院大学)「『アメリカのキリスト教』の検証——9.11自爆攻撃の煙の中から姿を現わしたアメリカ教の素顔」

(2004年度)

研究テーマ：エスニシティ・宗教・グローバリズム(春学期)、キリスト教と平和戦略研究(秋学期)

Ditlev Tamm(コペンハーゲン大学)「世俗化社会のデンマーク・キリスト教会——グロスボエル事件を手がかりに——」(ミニフォーラム)

岡本厚(岩波書店『世界』編集長)「グローバリズム下の東北アジア——平和をどう求めるか——」

西垣敬子(宝塚・アフガニスタン友好協会)「アフガニスタンの女性と子ども」(ミニ

フォーラム)

野田正彰 (関西学院大学) 「罪責と平和——アジアの中の日本」

ロニー・アレキサンダー (神戸大学) 「平和・武力紛争・ジェンダーと私たち——私たちが創り出す平和へ向けて——」

\*ウルリッヒ・ルツ (ベルン大学) 「イエスの死」 (神学部主催、RCC 共催)

(2005年度)

研究テーマ：キリスト教と平和戦略研究 (研究プロジェクト「キリスト教と平和戦略」と発展的に合併、『キリスト教平和学事典』編集に着手)

最上敏樹 (国際基督教大学) 「敵意の中垣を超えて——国連体制に欠けるもの」

富岡幸一郎 (関東学院大学) 「内村鑑三の平和論」

ベルンハルト・ノイエンスシュヴァンダー (スイス・ベルン州改革派教会) 「スピリチュアリティ研究と平和の推進」 (ミニフォーラム)

ハインツ・クラウトケ (ドイツ福音主義教会) 「ドイツにおけるイスラーム教徒市民との共生——キリスト教徒とイスラーム教徒の出会いのかたち」 (ミニフォーラム)

\*イルゼ・テート (ハイデルベルク大学) 「神の平和の戒めを求めるボンヘッファーの冒険」 (ミニフォーラム、ボンヘッファー生誕100年記念講演会、日本ボンヘッファー協会協賛)

\*近藤紘子 (チルドレン・アズ・ザ・ピースメーカーズ) 「ヒロシマ：平和運動と関西学院」 (公開講演会。学院史編纂室主催、RCC 共催)

\*チョン・ヒョンギョン (ニューヨーク・ユニオン神学校) 「宗教間の対話——フェミニストの視点から」 (公開講演会。神学部主催、RCC 共催)

(2006年度)

研究テーマ：キリスト教と平和戦略研究 (研究プロジェクト「キリスト教と平和戦略」と発展的に合併、『キリスト教平和学事典』編集)

山崎和明 (四国学院大学) 「D. ボンヘッファーの平和思想」

呉在植 (韓国・アジア教育院) 「東北アジアの平和と日本の役割——韓国キリスト者からの提言——」

水野隆一 (関西学院大学神学部) 「ヘブライ語聖書は『平和』について何を語るか」

前島宗甫 (関西学院大学RCC) 「平和を創る——あるNGOの軌跡から——」

Christian M. Hermansen (関西学院大学法学部) 「仏教の聖典——『観音経』の場合——」 (ミニフォーラム。研究プロジェクト「聖典と今日の課題」主催)

中村明日香 (同志社大学) 「『救世者』を待つ国の選択——イラン・イスラーム共和国とその社会——」 (ミニフォーラム。研究プロジェクト「聖典と今日の課題」主催)

東馬場郁生 (天理教校研究所) 「天理教の聖典について」 (ミニフォーラム。研究プロジェクト「聖典と今日の課題」主催)

斉藤泰（宗教法人「大本」総局公室企画部）「大本の聖典」（ミニフォーラム。研究プロジェクト「聖典と今日の課題」主催）

辻 学（関西学院大学商学部）「正しい終わり方——新約後期文書におけるパウロ受容と終末論——」（ミニフォーラム。研究プロジェクト「聖典と今日の課題」主催）

（2007年度）

研究テーマ：『キリスト教平和学事典』編集作業

奥本京子（大阪女学院大学）「思考停止をやめる！——紛争転換と非暴力で平和を創ろう——」

大橋毅彦（関西学院大学文学部）「上海から平和を考える」

オムリ・プージッド（関西学院大学大学院総合政策研究科）「イスラームと平和——アラブから見えてくるもの」

\*ジ・ジャンフォン（中国基督教協会）「今日の中国におけるキリスト教」（公開講演会。神学部と共催）

\*亀井伸孝（関西学院大学大学院社会学研究科）「アフリカろう教育の父フォスターとキリスト教ミッション」（公開講演会）

\*芦名定道（京都大学）「ティリッヒの平和の神学」（公開講演会。神学部と共催）

（2008年度）

研究テーマ：『キリスト教平和学事典』編集

根本かおる（日本UNHCR協会）「私と貴方の難民支援——国連の援助活動の現場から」  
古屋安雄（聖学院大学）「宣教『150周年』を迎えるに際して——どうしたら1%をこえられるか——」

\*賀川督明（「賀川豊彦献身100年」事業コア100）「私たちの『賀川豊彦献身100年』」（公開講演会。関西学院大学生活協同組合50周年企画委員会と共催）

\*関根清三（東京大学）「イサク奉獻の物語（創世記22章）を哲学する」（公開講演会。神学部と共催）

\*佐藤研（立教大学）「『禅』と『キリスト教』は矛盾しないのか？」（公開講演会。神学部と共催）

（2009年度）

研究テーマ：『キリスト教平和学事典』編集

ジェフ・ハーバー（人類学者）、ナウム・アティーク（聖公会司祭）「パレスチナとイスラエルの平和——ガザと占領——」

小中陽太郎（星槎大学）「小田実と歩いた世界」

オムリ・プージッド（RCC研究員）「クルアーンとパレスチナ問題」（ミニフォーラム。研究プロジェクト「聖典と今日の課題」主催）

- \*佐竹明（広島大学・フェリス女学院大学）「ヨハネ黙示録を読む」（公開講演会。神学部と共催）
- \*水垣渉（京都大学）「『殺す人』（ホモ・ネカーンス）——《いのち》をキリスト教的に考えるとどのようなことか——」（公開講演会。神学部と共催）
- \*スティーブン・リーパー（広島平和文化センター）「未来を決める4ヶ月——NPT再検討会議に向けて——」（RCC『キリスト教平和学事典』出版記念講演会）

（2010年度）

センター全体としての研究テーマなし（年次報告に記載されていない）

\*この年度以降はRCCフォーラムが開催されていない。

- 齊藤泰（宗教法人「大本」総局公室企画部）「大本と臓器移植の問題」（ミニフォーラム。研究プロジェクト「聖典と今日の課題」研究会を兼ねる）
- 松田史（真言宗御室派僧侶、NCC宗教研究所）「仏教の老病死と現代における命の問題」（ミニフォーラム。研究プロジェクト「聖典と今日の課題」研究会を兼ねる）
- 新井アサハン（神戸モスク）「神戸モスクの歴史と地域社会とのつながり」（ミニフォーラム。研究プロジェクト「ミナト神戸に宗教多元主義を探る」主催）
- \*寺園喜基（西南学院）「バルト神学の意義」（公開講演会。神学部と共催）
- \*Kim, Hong Ki（韓国・監理教神学大学）「ジョン・ウェスレーの聖化論と現代的靈性訓練」（公開講演会。神学部と共催）
- \*島藺進（東京大学）「近代日本人の死生観の変容——明治後期から現在まで」（公開講演会。神学部と共催）
- \*内田樹（神戸女学院大学）「召命（vocation）——呼ばれることについて」（公開講演会）
- \*G. タイセン（ハイデルベルク大学名誉教授）「史的イエスとケーリユグマ——学問的構成と信仰への道」（公開講演会。神学部・同志社大学神学部と共催）<sup>7</sup>

（2011年度）

研究テーマ？

- \* RCCフォーラムの開催なし。
- オムリ・ブージッド（RCC研究員）「チュニジアとジャスミン革命——その発端、現状と影響」（ミニフォーラム。研究プロジェクト「ミナト神戸に宗教多元主義を探る」主催）
- 大宮有博（名古屋学院大学）「わたしたちの命の源に目を向ける——名古屋学院大学での実験動物感謝記念礼拝の取り組み」（ミニフォーラム。研究プロジェクト「自然の問題と聖典」第2回研究会を兼ねる）

<sup>7</sup> 2010年9月13日に日本基督教団東梅田教会で開催されたこの講演会については、RCCの2010年度年次報告に記載がない。

林忠良（関西学院大学名誉教授）「〈キリスト教と文化研究センター〉開設の経緯をめぐって」（ミニフォーラム。研究プロジェクト「関西学院におけるキリスト教主義教育の展開」第1回研究会を兼ねる）

岡田裕成（大阪大学）「新大陸スペイン植民地の先住民社会とキリスト教美術」（ミニフォーラム）

\*岡本仁宏（法学部教授）・野口啓示（社会福祉法人「神戸少年の町」施設長）「関西学院と震災ボランティア——阪神・淡路大震災の経験から」（公開講演会。学院史編集室と共催）

\*井上順孝（國學院大學教授）「現代社会に息づく宗教文化」（公開講演会。神学部と共催）

\*W. リーネマン（スイス・ベルン大学名誉教授）「原子力エネルギーと被造物への責任——キリスト教神学の立場から——」（公開講演会。神学部と共催）

\*桃井和馬（写真家・ジャーナリスト）「宗教は戦争の原因なのか？」（公開講演会）

（2012年度）

研究テーマ？

\*この年もRCCフォーラムの開催なし。

辻 学（広島大学教授）「キリスト教と文化は衝突したか——RCCの歩みと関学のキリスト教主義教育——」（ミニフォーラム。研究プロジェクト「関西学院におけるキリスト教主義教育の展開」主催）

加藤隆久（生田神社宮司、神戸女子大学名誉教授）「地域に生きる神社を求めて」（ミニフォーラム。研究プロジェクト「ミナト神戸に宗教多元主義を探る」第2回研究会を兼ねる）

内藤新吾（日本福音ルーテル稔台教会牧師）「原発問題とキリスト教——平和、環境、人権——」（ミニフォーラム。研究プロジェクト「自然の問題と正典」第3回研究会を兼ねる）

松田史（真言宗御室派法園寺副住職、NCC宗教研究所研究員）「自然・環境問題と仏教」（ミニフォーラム。研究プロジェクト「自然の問題と正典」第5回研究会を兼ねる）

\*畠山重篤（国連フォレスト・ヒーローズ受賞者）「森は海の恋人——人の心に木を植える——」（公開講演会）

\*宮下規久朗（神戸大学准教授）「カラヴァッジョとキリスト教」（公開講演会。神学部と共催）

\*山浦玄嗣（医療法人隆玄理事長）「日本人の心に届く『ことば』を求めて——津波を越えて、闇から光へ——」（公開講演会）

（2013年度）

研究テーマ？

\*この年もRCCフォーラムの開催なし。

徐正敏（明治学院大学客員教授）「東アジアの和解と平和——日韓キリスト教史の視点から」（ミニフォーラム。研究プロジェクト「東アジアの平和と多角的な宗教・NGO・市民社会の役割」第1回研究会を兼ねる）

\*佐藤八寿子<sup>8</sup>「ミッション・スクール——神戸の坂道から見えるもの」（公開講演会）

\*辛淑玉（人材育成コンサルタント）「東アジアの和解とレイシズム——ヘイトスピーチを支える日本社会を問う」（公開講演会）

（2014年度）

研究テーマ？

\*この年はミニフォーラムも開催されていない。

\*加藤敏（自治医科大学教授）「キリスト教と医学・医療の密接なかかわり——現代社会を考える一つの糸口として」（公開講演会。神学部と共催）

\*櫻井義秀（北海道大学教授）「大学のカルト対策——信教の自由を守るために」（公開講演会）

\*岡田温司（京都大学教授）「黙示録の功罪——氾濫するイメージたち」（公開講演会）

RCCフォーラムは、RCCが「キリスト教〈と〉文化」の衝突する接点で生じる諸問題に焦点を合わせ、その問題との折衝の中で課題を担う研究センターであることを学内外に認識させる役割を担っている（そのため学外の著名な研究者、また学内の非キリスト教スタッフによる講演を主として開催してきた）。その役割は十分に果たされてきたと思うが、フォーラムは単発の講演会であるため、そこで提示された問題や議論がセンターの中で深められたり、講演者とのより深い対話へと結びついたりすることが難しい（例えば同志社大学の一神教学際センターは、講演者を中心とした非公開研究会を同時に開催することでこの点を克服している）。RCCの研究会や研究プロジェクトには、議論の深化というこの大事な役割を担うことが期待されるが、果たしてセンター全体の研究テーマやRCCフォーラムで提示された問題との連携を意識した議論が展開できているだろうか。

目につくのは、2010年度以降、RCCフォーラムが開催されていないことで<sup>9</sup>、

8 2013年度年次報告の当該欄には、肩書きの記載がなく、「I. 概況」のところに「『ミッション・スクール——あこがれの園』著者」とある。

9 2013年度の年次報告には、「今年度からは、公開講演会もこのプロジェクトの研究テーマ

これは、2009年に『キリスト教平和学事典』が刊行されたことと関連しているように思われる。RCCフォーラムは、RCCがセンター全体として担っている研究課題を学内外に示す意味も持っている。したがって、センター全体をあげて取り組んできた『キリスト教平和学事典』が完成された後に全体としての研究テーマがなくなった(?)のに応じて、フォーラムも開催が難しくなったように見えるのである。もう一方では、RCCが研究プロジェクトの集合体へと変化したことも関係していよう。この点は、センター全体としての方向性がはっきりしていたそれまでの傾向から明らかに変化しており、「キリスト教〈と〉文化」の衝突を研究対象とするという、RCCの初期理念がどのように継続されるのかが問われている。

同様に目立つのは、2007年以降、神学部との共催による講演会が急増していることであり、しかも内容的には神学部が単独で開催するのがふさわしいと思われる講演が多い。この背後には、講演にかかる諸経費の共同負担という事情もあると考えられるが、RCCの研究テーマとの関連が見えにくい講演会を（共催であっても）開催することは、RCC本来の目的に適っているかどうかが問われると同時に、神学部とRCCとが並立していることの意義をばやけさせる危険をも孕んでいる。

#### 4. 研究プロジェクト

RCCは、2000年度からの3年間の総合研究主題を「民族と宗教」として、主題に基づいたRCCフォーラムなどの活動を行なったが、それとは別に、研究プロジェクト「暴力とキリスト教」を2002年度に立ち上げた（筆者もそのメンバーであった）。センター内に特定の研究プロジェクトを置き、共同研究を展開するという形は、それまでのRCCにはなかったものであり、RCCの新しい活動形態を切り

---

に沿ったもので行うこととし」とあり、公開講演会をRCCフォーラムに相当するものと見なしている様子が見える。しかし公開講演会は元来、フォーラムの枠に入らないものを指しており、全体が「第〇〇回」という通し番号で表されるRCCフォーラムとは別物のはずである。この問題に関する記載は年次報告には見られない。

開くこととなった<sup>10</sup>。これを端緒として、RCCの研究活動は、研究プロジェクト単位で展開される体制へと移行していくことになる。以下がプロジェクトおよびメンバーの一覧である（所属は当時のもの）。

＊「暴力とキリスト教」(2002-2003年度)

前島宗甫 (RCC)、水野隆一 (神学部)、平林孝裕 (神学部)、中道基夫 (神学部)、舟木譲 (経済学部宗教主事)、辻 学 (商学部宗教主事)

＊「スピリチュアリティと宗教」(2003-2006年度)

窪寺俊之 (神学部)、D. ヴィダー (神学部)、平林孝裕 (神学部)、對馬路人 (社会学部)、舟木譲 (経済学部宗教主事)

＊「聖典と今日の課題」(2005-2010年度)

樋口進 (RCC)、水野隆一 (神学部)、嶺重淑 (神学部→人間福祉学部宗教主事)、辻学 (商学部宗教主事。2006年度まで)、土井健司 (神学部。2007年度より)

＊「聖餐の理論と実践」(2005-2008年度)

打樋啓史 (社会学部宗教主事)、中道基夫 (神学部)、山上浩嗣 (社会学部)、Christian M. Hermansen (法学部。宣教師)、Andreas H. Rusterholz (文学部。宣教師)

＊「キリスト教と平和構築」(2005年度。センター全体の研究テーマと合併)

神田健次 (神学部)、平林孝裕 (神学部)、Ruth Grubel (社会学部。宣教師)、栗林輝夫 (法学部宗教主事)、舟木譲 (経済学部宗教主事)

＊「関西におけるキリスト教の文化形成力」(2007-2008年度)

平林孝裕 (神学部)、中道基夫 (神学部)、打樋啓史 (社会学部宗教主事)、舟木譲 (経済学部宗教主事)、辻学 (広島大学)

＊「ミナト神戸に宗教多元主義を探る——〈海のシルクロード〉の文化と宗教的共生」(2010-2012年度)

神田健次 (神学部)、山本俊正 (商学部宗教主事)、栗林輝夫 (法学部宗教主事)、畠山保男 (RCC)、Christian M. Hermansen (法学部。宣教師)、村瀬義史 (総合政策学部宗教主事)、オムリ・ブージッド (総合政策研究科研究員)、徐亦猛 (神戸中華教会。2011年度より)

＊「文化／社会抵抗における原動力としての聖書受容の諸相」(2010年度)

浅野淳博 (神学部)、岩野祐介 (神学部)

10 研究プロジェクト「暴力とキリスト教」は、2003年度から大学共同研究として採択され、その研究成果を、2004年度からは総合コースとして授業の形で提供すると共に、2005年3月には関西学院大学出版会から『暴力を考える：キリスト教の視点から』（前島宗甫〔編著〕、関西学院大学共同研究「暴力とキリスト教」研究会〔編〕）を刊行した。

＊「関西学院大学におけるキリスト教主義教育の現在」(2010年度～)

平林孝裕(国際学部宗教主事)、山本俊正(商学部宗教主事。2011年度より)、舟木譲(経済学部宗教主事。同)、打樋啓史(社会学部宗教主事。同)、嶺重淑(人間福祉学部宗教主事。同)

＊「自然の問題と聖典」(2011-2012年度)

樋口進(RCC)、嶺重淑(人間福祉学部宗教主事)、土井健司(神学部)、平林孝裕(国際学部宗教主事)、水野隆一(神学部)、奥野卓司(社会学部)、近藤剛(神戸国際大学)、大宮有博(名古屋学院大学)

＊「東アジアの平和と多元的な宗教・N G O・市民社会の役割」(2013年度～)

山本俊正(商学部宗教主事)、榎本てる子(神学部)、村瀬義史(総合政策学部宗教主事)、Christian M. Hermansen(法学部、宣教師)、水戸考道(法学部)、金永完(中国山東大學副教授)、梁陽日(立命館大学)

＊「現代文化とキリスト教」(2013年度～)

水野隆一(神学部)、打樋啓史(社会学部宗教主事)、東よしみ(神学部)、畠山保男(RCC)、鈴木慎一郎(社会学部)、舟木譲(経済学部宗教主事)、白波瀬達也(社会学部教務補佐)、三阪夕芽子(社会学部大学院生)

2002年度から始まった、これら研究プロジェクトを主体とする研究体制は、RCCフォーラムに外部講師を招くスタイルに依存する割合が高かったセンターの「研究」を、内部発信型へと発展させていくのに寄与したと言える。

ただしその一方で、プロジェクト単位の研究内容が、センター全体の研究課題とどう結びつくのかわかりにくい内容になる恐れもある。実際、『キリスト教平和学事典』刊行事業が終了した2009年度から後のプロジェクトには、RCCとしてのまとまりが見えにくい。また、センターの元来の趣旨である「キリスト教〈と〉文化」のぶつかる接点で見えてくる課題を共有し、キリスト教の「外」から投げかけられる問題提起を受け止め折衝する(上述Ⅰ参照)というプロジェクトになっていなければ、RCCのプロジェクトとしてふさわしいとは言えないであろう。その点を考えると、所謂キリスト教スタッフのみで構成されている研究プロジェクトが目立つが、これは、キリスト教徒が種々の問題を一緒に研究する場という性格を運びやすく(「外」からの問題提起を受けるといふ動機が薄くなる)、非常に注意が必要である。RCCの設立経緯を十分に踏まえつつ、昔

のキリスト教主義教育研究室（後述参照）でも出来たような内容になっていないか、また神学部主体の共同研究でも良いような内容の研究ではないかという点を常に検証することが求められる。さらには、複数分野専攻制の副専攻プログラムを神学部に移管させたことで、RCCの研究成果を教育へと還元する手段が少なくなっている現状に鑑みれば（上述2）、「暴力とキリスト教」プロジェクトが行なったように、研究プロジェクトが授業実施の単位となっていくことも今後さらに期待される。

## 5. 評価

ここまでの検証を踏まえた結果として言えるのは、センターの趣旨（上述）を実現するためには「研究員の構成においても、研究の方向・内容においても、本研究センターが〈キリスト教〉に縮約してしまわないように、配慮する」（1997年度第1回センター長室会記録）という文言が持っている視点は、その後のRCCの歩みに照らして見ると、必ずしも忠実に守られてきたとは言えないということである。

研究員構成は、2005年度から急にキリスト教スタッフに偏った。したがって、「キリスト教の〈外〉から投げかけられている問題提起を真摯に受け止め」（同記録）る場としての研究員体制が機能しなくなった。近年は、キリスト教スタッフ以外の研究員を置く方向が再び見え始めているが、研究プロジェクトのメンバー全員をRCCの研究員としているので、「研究員」という立場の持つ意味合いが、RCC発足当初とは大きく変化したことになる。

RCCフォーラムはそのような場として機能してきたが、1回性が強いので、そこで投げかけられた課題を共有して議論していくことが困難である。また近年は、RCCが主催・共催する意味がわかりにくい講演会（とりわけ神学部との共催講演）が目立つが、これはRCCの存在意義を外部から見えにくくさせる危険を孕むので（神学部とどう違うのかがわからない）、注意が必要である。

研究プロジェクト体制は、個別の研究活動を活発化させたが、センター全体のテーマ設定が（『キリスト教平和学事典』の編纂という事業を除くと）曖昧に

なり、センターの向かう方向性が見えにくくなるという現象を伴うことになった。また個々のプロジェクトにおいても、キリスト教スタッフが構成員のほぼ全てである場合が少なくないため、キリスト教徒が色々な問題を研究するという形になりやすく、「キリスト教〈と〉文化」の衝突する接点で見えてくる課題を受け止め、キリスト教主義の課題とするという、センター本来の趣旨が弱まりやすい。(もっとも、新しいプロジェクトの中には、キリスト教スタッフ以外をメンバーに加えることで、この問題点を克服しようとしているものが見られる。)

「キリスト教と文化の衝突」という、RCCならではの視点が見えにくくなるような歩みに至った要因としては、次の2点が考えられる。

- (1)宗教主事と神学部教員の世代交代。RCC設立時の趣旨が十分に継承されたかどうか、また、趣旨を知っていたはずのメンバーがそのことをきちんと伝えていたか(あるいは、そのメンバーたち自身が林忠良初代センター長の意図を共有していたか)も問われる。
- (2)キリスト教主義教育研究室との関係整理がきちんと出来なかったこと。その違いを明確にしようとしながらも、施設や資料をそのまま継承してしまったことも手伝って、あたかもRCCが「キリスト教主義教育研究室を発展的に改組」<sup>11</sup>したものであるかのような印象を持たせることになってしまった(おそらく関係者の中にもそう考えていた人間がいたので、このような、事実と異なる記述がなされることになった)。

### Ⅲ RCCの課題と困難

RCCには、自らの存在意義が学内(と学外)で理解されるために境界線をはっきりさせるべき二つの存在がある。すなわち、キリスト教主義教育研究室(および宗教センター)と神学部である。

1. RCCは、キリスト教スタッフないしクリスチャン教員がキリスト教主義

11 『関西学院事典』(2001年)、82頁。なお、事実と反するこの記述は、増補改訂版(2014年)では削除され、「キリスト教と文化研究センター」の項目全体が大幅に書き改められている。

教育について研究する場所ではない。RCCは「キリスト教と文化」の衝突によって生まれる学際的研究を通して、キリスト教を問い直すと同時に、キリスト教外の知的営みをもキリスト教的視点から問い直す場であり、その相互作用を教育の場に還元しようとする（還元の主体には非クリスチアンの教員も含まれ、非キリスト教的用語でキリスト教主義が語られることも当然あり得る）。チャペルやキリスト教学講義もそのような還元の場として理解されることで存在意義を持ち得る（キリスト教学の授業時間がしばしばRCCフォーラム等に提供されてきたのは、その理解に基づく）。しかしこの違いが学内で十分に認識されているようには（少なくとも私の在職中には）見えず、キリスト教のことはキリスト教の教員がやるものという意識が相変わらず見え隠れしていた。

RCCは、そのようなキリスト教理解を打破する（＝キリスト教主義教育の内実化！）意図を持っているはずであるが、その意図には本来そぐわないプログラム（例えば「父母のためのキリスト教講座」<sup>12</sup>。これは本来宗教センターの管轄になるのがふさわしい）も抱えてしまっている。また、（祭司としての！）宗教主事がやっているセンターだというので、宗教センターとの区別も曖昧に理解されている場合さえある。結局のところ、（神学部を含む）各学部でのキリスト教プログラムがRCCの意図とどう連動しているかが打開の唯一の鍵であるように思われる。

2. 神学部は元来、キリスト教の専門家を養成する機関であることが、その不可欠の存立意義である。それゆえ研究・教育の営みの基本的枠組としてキリスト教的な神信仰の立場を前提とする<sup>13</sup>。しかし「キリスト教〈と〉文化」の衝突に重きを置くRCCの研究はそのような前提を持たず、非キリスト教徒による問題提起もまたRCCの研究の重要な構成要素である。この研究性格の違いが常にはっきりと示されていないと、神学部とRCCの違い（そして並存する意味）は

12 2014年度からは「RCCキリスト教講座」と改称され、大学在学生の「父母」（保証人）以外にも公開されている。（[http://www.kwansei.ac.jp/c\\_rcc/c\\_rcc\\_001812\\_2.html](http://www.kwansei.ac.jp/c_rcc/c_rcc_001812_2.html) 2015年12月14日確認）

13 「神学」はそうだが、「キリスト教学」はそうではない。後者はキリスト教という宗教についての研究であり、研究者の信仰的立場を問わない。

外部から見えなくなる。ところが、神学部が2004年度に「キリスト教思想・文化コース」を設置し、元来RCCが設置していたMDSの授業が神学部に移管されたことにより、その違いはわかりにくくなった（どちらかと言えば、神学部がRCCの領域に踏み込んだのであるから、これは神学部の存立意義を見えにくくさせる事態なのかもしれない）。

難しいのは、RCCで活動するキリスト教スタッフ（神学部教員、宗教主事、宣教師）はそのほとんどが（宣教師は必ずしもそうでない）、神学諸科を本来の研究領域としていることである。したがって、どうしても「神学部的」関心が共同研究でも前面に出て来る傾向が強くなり、共同研究の場がRCCである必然性が弱くなる危険を孕む（神学部を舞台としても良いはずなのに、伝統的に神学部が宗教主事を遠ざけてきたという「歴史的経緯」のせいで、RCCが使われる）。だとすれば、RCCにとって重要なのは、キリスト教の「外」からの問題提起を（個々の研究プロジェクトにおいても、またRCC全体の活動においても）いかに活発化させるかということであろう。この点が疎かになると、RCCは「拡大神学部」と化す。

#### IV 終わりに

冒頭で述べたように、林忠良氏は、「『キリスト教主義』が大学の『研究・教育』に果たし得る積極的な意義を、『歴史的経緯』に依存するのではなくて、その現在における意義として、再構築することが、〔RCCの〕喫緊の課題である」と指摘している（講演レジュメ8頁）。その「積極的な意義」とは、キリスト教主義を示しつつも、キリスト教的専門用語で語られるものであってはならないという難しさをも持つ。非キリスト教徒である構成員が理解し、自らも学生に説明できる「意義」の提示が求められている。その課題を果たすために、RCCはどのような歩みをしてきただろうか。それが本稿の問いであった。

「キリスト教と文化」の衝突するところに研究課題を見出し、その課題と取り組むことによって「キリスト教主義」の現代的意義を再構築するという、RCC

の目的が果たされるかどうかは、まさしく関西学院全体のキリスト教主義の存亡に関わる。それゆえ、RCCがキリスト教スタッフによる研究と運営に偏ることなく、「キリスト教と文化との衝突」という視点を実践し、その成果を広く、わかりやすい形で発信していくことが今後も求められるであろうし、この視点が維持される限り、RCCは神学部とは異なる独自の存在意義を持ち続けることができるはずである。いまやRCCの中心ともなっている個々の研究プロジェクトが、RCC全体の課題を意識しつつ運営され、その成果を大学全体に還元していくことを期待したい。